コミュニケーション能力向上に向けたCALL文法教材の開発

日大生産工　　○内堀朝子
日大生産工　　中條清美
日大生産工(学部)白井篤義
日大生産工(院)　山崎淳史

1. はじめに

日本大学生産工学部では，近年急速にグローバル化する社会において，世界共通語としての英語の必要性がより高まっていることを背景に，本学部学生のような初級レベル学習者の実用的英語コミュニケーション能力の向上を目指す一環として，2001年よりCALL授業を行っている。この間の授業実践を通じては，より効率的なCALL教材の開発や，CALL授業学習支援システムの構築などが進められ，その教育効果も測定・検証されてきた[1) 2) 3)]。

それらの報告によると，本学部におけるこれまでのCALL授業の教育効果として主に，(i)コミュニケーション能力を評価するテストの得点上昇，(ii)学習者の動機づけの改善が挙げられる。一方，教育現場には，多くの問題点―例えば，適正なクラス・サイズや学習者の学習意欲の低さ，高校までの学習到達度の低下など―が見られ，それらは容易に解消されることが望めない状況にある。そのような中でCALL授業の有効性を更に高めていくためには，どのような方向で拡充を図ってゆけばよいだろうか。

これまでの本学部CALL授業では，リスニング能力に重点をおいた総合的コミュニケーション能力および語彙力の向上に役立てるため，千葉大学開発のリスニング教材「Listen to Me! シリーズ」および自主開発の語彙力養成教材「TOEIC Vocabulary シリーズ」を，主に使用してきた。ここで，外国語学習をより促進するためには，文法学習が必要かつ有効である[4) 5)]との従来の指摘を振り返れば，今後は，CALL授業の中で適切な文法指導を補っていく必要があることが分かる。

文法の学習は学生からはとかく退屈なものと捉えられがちであるが，英語で情報を受信・発信する際の実用的な英語力を高めるには，基本的統語構造の習得が重要である。また，文法能力がコミュニケーション能力にとって必要不可欠な一部を成していることからも，文法指導は，一般英語教育においてより積極的に取り組まれるべき分野であると言えよう。

2. 本研究の目的

本学部生の文法学習に関する意識について，質問紙を用いて調査したところ，「英会話を覚えたいので，それにあうような文法知識を身につけたい」「中２で分からなくなってから，嫌いになってしまったので、好きになれたらいい」「文法の仕組みを分かりやすい例などで説明してくれると嬉しい」「分かりやすく具体的に教えて欲しい」「TOEICで点数を取れるようになりたい」などの声があった。ここから，理系学部生に見られる傾向として英語の苦手意識はあるものの，自分達を取り巻く社会のニーズは理解しており，文法を通じても英語力を向上させたいという意欲を持っていることが伺えた。

これらの学生は入学前までに，いわゆる学校英文法に基づく英語教育を受けているのであるが，その枠組みの有効性に対して，従来，疑問も呈されてきた。例えば，学校英文法で重要視されている文法項目として，いわゆる５文型が挙げられるが，都筑[6)]が高校英語教師35名を対象にした調査では，全員が５文型指導を行っているが，その内60%が５文型の考え方に矛盾や不備を感じたことがあるという。また谷口[7)]も，「実用コミュニケーション能力の基礎力養成のために必要な文法知識は，５文型を中心とする学校英文法の枠組み以外の観点に基づく指導の中で補っていく必要がある」と述べている。

これに対し，新たな視点からの文法指導に関する示唆が既になされている。例えば田中他[8)]は，英文法学習法として，「チャンク」即ち意味を作るまとまり（名詞チャンク，動詞チャンクなど）を提案している。また，内堀他[9)]は，

The Development of English CD-ROM Materials for Teaching Grammar toward Improvement of Communicative Proficiency

Asako UCHIBORI, Kiyomi CHUJO, Atsuyoshi SHIRAI, and Atsushi YAMAZAKI

学習者の文法力を向上させるために，「句」即ち文を構成する単位であるまとまり(例えば「名詞句」，「動詞句」など)と，その内部構造に着目した。これらの示唆に共通するのは，５文型以外に必要な文法知識を補うには，チャンクや句のような文の要素としてのまとまりやそれらの構造を意識した指導が重要だという点である。

本研究では，以上の現状および問題点を踏まえ，初級レベル学習者が実用的な英語コミュニケーション能力を向上させるための文法に焦点を当てたCALL教材を開発する。具体的には，１)コミュニケーション能力養成に役立つ効率的な文法指導に必要な学習項目を選定･配列し，２)それらに基づいたコースウェアおよびソフトウェアを作成し，３)作成した文法教材を用いた半期間の授業実践による教育効果を測定し，考察する。

3. 文法力養成教材「TOEIC Grammar」の制作

まず，コミュニケーション能力養成にとって不可欠な文法指導に必要な学習項目として，上記のような先行研究による示唆を参考に，(1)名詞句，(2)動詞句を選定することとした。名詞句・動詞句は，それぞれ文の主語･述語を構成する主要素である。更に，名詞句・動詞句の主要部である名詞･動詞およびこれら以外に句の内部に頻出する要素である形容詞･副詞について，それぞれの(3)語形変化を取り上げた。語形変化は，各品詞の区別や句構造の分析への手がかりとなる。これらは，高校までの英文法指導の中で取り扱われてこなかった文法項目であるが，TOEICなど実用的英語コミュニケーション能力を問われる場面では，重視されているものである[10)]。

選定した文法項目を指導する際に例示する語句や文は，TOEIC公式ガイドや，市販の英文法問題集･TOEIC模擬問題集などに見られる英語の難易度レベルと同等または低いものとなるよう配慮し，またそれら掲載されている例文･用例を参考にしながら作例した。

コースウェアを構築するに当たっては，以上の文法項目とその例文・用例に対し，英語初級学習者にとって適切な「解説」が与えられるよう配慮した。特に，句の中心となる要素とそれ以外の要素（補部，修飾要素）との関係を理解させることは重要であるので，名詞句・動詞句の内部構造は明示的に図示したものを繰り返し提示した。更に，学習者が提示された句構造をしっかり把握できるよう，充分な量の練習問題を設定した。また問題の難易度に応じて，誤答した場合はヒントを参照できるようにした。**図１**に名詞句に関する問題・解答画面を示す。

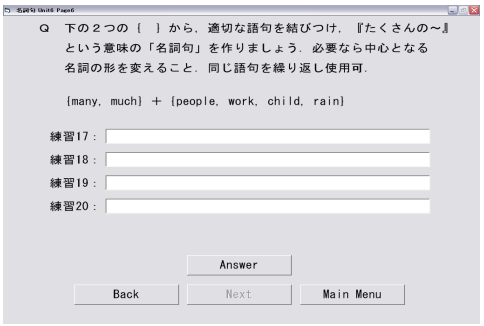

図１　練習問題および解答画面

４．指導実践と結果

以上の文法力養成教材を使用して，３クラスで半期間CALL授業を行い，学習者の４月・７月の得点の変化を観察した結果，指導後に得られた得点上昇には有意な差があることが判明した。

参考文献

１）中條清美，福島昇，須田理恵，木内徹，M. Genung，B. Perisse，CALLシステムによるコミュニケーション能力養成の指導効果，日本大学生産工学部研究報告，第35巻，pp.1-9, 2002.

２）中條清美，山﨑淳史，牛田貴啓，ビジュアルベーシックによるTOEIC用語彙力養成ソフトウェアの試作Ⅱ，日本大学生産工学部研究報告，第36巻，pp.43-53, 2003.

３）中條清美，牛田貴啓，山﨑淳史，マイケル・ジナング，内堀朝子，西垣知佳子，ビジュアルベーシックによるTOEIC用語彙力養成ソフトウェアの試作Ⅲ，日本大学生産工学部研究報告，第37巻，pp. 29-43, 2004.

4）Lightbown, P. and Spada, N. “Focus-on-Form and Corrective Feedback in Communicative Language Teaching”. *Studies in Second Language Acquisition*, vol. 12, 429-446, 1990.

5）内堀朝子，中條清美，文法指導による大学初級レベル学習者の英語コミュニケーション能力養成の効果，日本大学生産工学部研究報告，第37巻，pp. 75-83, 2004.

6）都筑宏海，高校英語における5文型指導に関する考察－新たな文型指導の提示－，函館英文学，第42巻，pp. 125-144, 2003.

7）谷口賢一郎，『英語教育改善へのフィロソフィー－21世紀の国際教育－新指導要領に向けて』，東京：大修館書店，p.10, 1998.

8）田中茂範・佐藤芳明・河原清志，『チャンク英文法』，東京：コスモピア，2003.

9）内堀朝子，中條清美，長谷川修治，大学初級レベル学習者の実用英語コミュニケーション能力を高める文法指導に向けて，第42回大学英語教育学会全国大会要綱，於東北学院大学，pp.116-117, 2003.

10）内堀他，前掲発表.